S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション・導入

授業スケジュール

前期：初期キリスト教から古代キリスト教

オリエンテーション――キリスト教思想史について

１．キリスト教の成立と初期キリスト教	
２．キリスト教の制度化と初期カトリシズム	
３．ヘレニズムのユダヤ教	5/12
４．グノーシス主義	5/19
５．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家	5/26
６．キリスト教教父２――オリゲネス、アレクサンドリア学派	6/2
７．キリスト教基本教理の形成	6/9
８．キリスト教の国教化	6/16
９．キリスト教教父３――アウグスティヌス	6/23
１０．研究発表・角元	6/30
１１．研究発表・岡田	7/7
１２．研究発表・長岡	7/14
１３．研究発表・山本	7/21
１４．研究発表・金	7/28

＜キリスト教の制度化と初期カトリシズム＞

１．制度化の必然性とその意義

・なぜ、制度化は不可避なのか　・制度化は何をもたらすのか

・制度化を規定する内的あるいは外的な要因

２．フェミニスト的聖書解釈の問題提起

・イエスの宗教運動における徹底的な平等主義

・制度化の負の側面を超える思想形成の可能性、歴史の見直し掘り起こす作業。

・初期キリスト教における女性

「ユーニアン」（対格）は、「ユニアス」（男性）か、「ユニア」（女性）か。

３．牧会書簡の世界

「市民倫理の感覚」「キリスト教的市民性」「市民的キリスト教」、「パウロと牧会書簡とのずれ」「カリスマ的人物としての史的パウロは、「愚か者になったつもりで」「気が変になったように」語る（二コリ一一・二一、二三）。ところが牧会書簡の著者は、「平安で静かな生活を、真に信心深く真面目に送る」ことを勧める（一テモ二・二）。これら二つの行動の類型は、時間的に継起するものというよりも、教会形成のダイナミックスを現出する場の両極を示す。」（同、153 頁）

４．初期カトリシズム

３．ヘレニズムのユダヤ教

（1）ユダヤ教とそのキリスト教に対する関係性

１．古代イスラエル宗教からユダヤ教への歴史的展開

バビロン捕囚以後：唯一神教への純化（宗教改革）、正典編集とその文書化

ディアスポラ（神殿からシナゴーグへ）

↓

ヘレニズム世界（BC.４世紀のアレクサンダー大王帝国のもたらしたもの）
のユダヤ教。ヘレニズム都市のユダヤ人。エジプトのアレクサンドリア。
２．唯一神教への純化と新たな思想展開
知恵文学と黙示文学
『マカバイ記』「黙示的終末論」
「紀元前二世紀に起こったマカバイの反乱の時期以降」（大林、59）
「国家全体としての苦難ではなく、信仰ゆえにふりかかる個人の苦難、死は、従って殉教死」「復活思想は、信仰のために死んでいった、義なるものに対する報いの必要性から生まれてきた」、「善なるものが残虐にも抹殺されていった。その死を犬死にさせまいとする、当時の同胞のいたわりから、個人の復活という黙示的信仰が広がっていったのである」（大林、60）、「義憤」（62）
３．ヘブライ語聖書のギリシャ語訳（LXX）
BC.３世紀のアレクサンドリアのユダヤ人共同体、70 人の長老の派遣。
パウロが読み引用した聖書は何か？
４．「彼ら教会の物書きたちがヘブル語聖書ではなくて、ギリシア語訳の聖書を使用したことです。ここでまた注意いただきたいのは、ギリシア語訳が彼らにとってもはや「翻訳聖書」ではなく、それこそが「聖書」となっていたことなのです。その聖書は彼らによって「神の息吹を与えられた聖なる書」と見なされていたのです」（秦、168）
「キリスト教徒たちは、新約聖書に何を含めるかの最終的な合意には達していなかったものの、次第にユダヤ人たちが生み出したギリシア語訳を自分たちの「聖書」だと主張しはじめます」、「彼らユダヤ人にしてみれば、新約聖書中の福音書記者や手紙の書き手はまだ許せました。なぜならば、彼らは同胞のユダヤ人であり、かつては同じユダヤ教徒でもあったからです。キリスト教は、最初、ユダヤ教の一派と考えられていたからです。しかし、二世紀になりますと、事情は随分と異なるものになります。パレスチナでは対ローマの第二次ユダヤ戦争が起こります」（171）
「そのような状況下で。ユダヤ教徒たちはキリスト教徒たちに向かって何を言えたでしょうか？　彼らの先達がアレクサンドリアその他で生み出したギリシア語訳がキリスト教徒たちによって恣意的に使用されていることに抗議の声をあげることができたのでしょうか？」（172）

（２）ユダヤ教の知恵文学の展開とキリスト教
５．『知恵の書』『シラ書（集会の書）』
６．創造思想の展開と知恵の人格化
７．箴言「1:20 知恵は巷に呼ばわり／広場に声をあげる。21 雑踏の街角で呼びかけ／城門の脇の通路で語りかける。22 「いつまで／浅はかな者は浅はかであることに愛着をもち／不遜な者は不遜であることを好み／愚か者は知ることをいとうのか。23 立ち帰って、わたしの懲らしめを受け入れるなら／見よ、わたしの霊をあなたたちに注ぎ／わたしの言葉を示そう。24 しかし、わたしが呼びかけても拒み／手を伸べても意に介せず 25 わたしの勧めをことごとくなおざりにし／懲らしめを受け入れないなら 26 あなたたちが災いに遭うとき、わたしは笑い／恐怖に襲われるとき、嘲笑うであろう。27 恐怖が嵐のように襲い／災いがつむじ風のように起こり／苦難と苦悩があなたたちを襲うとき。」
「8:1 知恵が呼びかけ／英知が声をあげているではないか。2 高い所に登り、道のほとり、四つ角に立ち 3 城門の傍ら、町の入り口／城門の通路で呼ばわっている。」
「8:22 主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしえの御業になお、先立って。23

永遠の昔、わたしは祝別されていた。太初、大地に先立って。24　わたしは生み出されていた／深淵も水のみなぎる源も、まだ存在しないとき。25　山々の基も据えられてはおらず、丘もなかったが／わたしは生み出されていた。26　大地も野も、地上の最初の塵も／まだ造られていなかった。27　わたしはそこにいた／主が天をその位置に備え／深淵の面に輪を描いて境界とされたとき 28　主が上から雲に力をもたせ／深淵の源に勢いを与えられたとき 29　この原始の海に境界を定め／水が岸を越えないようにし／大地の基を定められたとき。30　御もとにあって、わたしは巧みな者となり／日々、主を楽しませる者となって／絶えず主の御前で楽を奏し 31　主の造られたこの地上の人々と共に楽を奏し／人の子らと共に楽しむ。32　さて、子らよ、わたしに聞き従え。わたしの道を守る者は、いかに幸いなことか。33 諭しに聞き従って知恵を得よ。なおざりにしてはならない。34 わたしに聞き従う者、日々、わたしの扉をうかがい／戸口の柱を見守る者は、いかに幸いなことか。35 わたしを見いだす者は命を見いだし／主に喜び迎えていただくことができる。36 わたしを見失う者は魂をそこなう。わたしを憎む者は死を愛する者。」」

８．Ben Witherington III, *Jesus the Sage. The Pilgrimage of Wisdom*, Fortress, 1994.
Ecclesiastes / From Ben Sira to the Wisdom of Solomon / Hokmah Meets Sophia（The Legacy of Alexander in the Holy Land）/ Wisdom in Person: Jesus the Sage / From Q to James / Paul Apostle: Sage or Sophist? / The Gospels of Wisdom: Matthew and John

９．Elisabeth Schüssler Fiorenza, *Jesus. Miriam's Child, Sophia's Prophet*, Continuum, 1994.
The Invitation of Wisdom, The Children of Wisdom, The Power of Wisdom

10. 知者の系譜と教父思想
キリスト教の基本教理の形成

11. クムラン問題　→　クムランを素材とした歴史小説。cf. 邪馬台国問題、
ダヴィンチ・コード
バーバラ・スィーリング『イエスのミステリー――死海文書で謎を解く』日本放送出版協会。
「オーストラリアのバーバラ・スィーリング教授の数々のお告げは、これまでの俗受けするクムラン関係書のうちでも最低である」（オットー・ベッツ／ライナー・リースナー『死海文書――その真実と悲惨』Lithon、50 頁）

（３）フィロン

12. キリスト教への多層的・多面的な影響
聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者

13. フィロンのロゴス論

「フィロンのロゴス論の真の意図は、伝統的なヘブライ的神観から、神と世界、啓示と理性、信仰と哲学との二つの異質的原理が、なんらの第三者的中間者を媒介し、あるいはまた直接的に連続することなく、それぞれ絶対的断絶性を保持しつつ、しかも相互に関係しうる原理を確立することであったとみるべきであろう」（平石、285）、「神は世界を創造し、摂理をもって支配するが、世界もまたこのような神的生命の創造過程に参与しているのである。フィロンはこのような神と世界との「非連続の連続」の関係を成立せしめる原理を、象徴的相関性としての「神のロゴス」として把握したのである」、「ロゴスの二重性」、「フィロンの「ロゴス」は神の世界創造の宇宙論的原理であると言いうるであろう」（286）、「第二に、神がこのような純粋思惟内容の中から、この感覚的世界の範型として、自己の外部に表出したいわゆるイデアの総体としての「英知的世界」を意味する。フィロンが本来的意味で「神のロゴス」と呼ぶところのものは、この第二の意味の「ロゴス」で

あること」、「フィロンはイデアをプラトン哲学の本来的意味で理解し」（286-297）、
「第三に、以上「英知的世界」の模写としてのこの感覚的世界が造られたということは、「神のロゴス」がこの世界に内在化され、「世界法則」、あるいは「人倫の原理」として、万物を結合、保持、存続せしめる力として働くことを意味するのである」（287）。
「フィロンがプラトンから学んだ「範型―模写」の図式は、世界創造における創造者と被造物との根源的な象徴的関係性を示す基本的図式として、新たな意味が付与されるに至ったのである」（288）。

14.『世界の創造』の「二段階創造論」

第一創造物語→可知的人間（人間のイデア）／第二創造物語→可感的人間（土の塵）
神の像

↓

キリスト教におけるプラトニズムの受容、聖書のアレゴリカルな解釈の影響。
アウグスティヌスによる創世記注解

（４）キリスト教にとってユダヤ教とは何か

15. ヘレニズム世界という環境の中におけるキリスト教の母体
ヘレニズム世界への土着化に二関しても、そのモデルになる
16. キリスト教がいつからキリスト教に、いかなる意味でキリスト教になったかを理解する上で不可欠の参照点。
17. キリスト教の聖書的伝統からの逸脱に対する批判のための外部視点を提供する。
キリスト教の逸脱形態には、旧約聖書否定論がしばしば伴う。
18. きわめて近い存在であり、同時に不幸な歴史。
キリスト教がパウロ主義を採用したことの意味。

＜参考文献＞

１．M・ノート『イスラエル史』日本基督教団出版局。
２．荒井章三・森田雄三郎『ユダヤ思想』大阪書籍。
３．山我哲雄『聖書時代史旧約編』岩波現代文庫。
４．石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社。
５．市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社。
６．秦剛平『乗っ取られた聖書』京都大学出版会。
『ヨセフス――イエス時代の歴史家』ちくま学術文庫。
７．秦剛平訳『七十人訳ギリシャ語聖書』全５分冊、河出書房新社。
８．ヨセフス（秦剛平訳）『ユダヤ戦記』全７巻、『ユダヤ古代誌』全20巻、『アピオーンへの反論』、『自伝』山本書店。
９．H.L.フェルマン、秦剛平編『ヨセフス論集』山本書店。
10. 平石善司『フィロン研究』創文社。
11. グッドイナフ『アレクサンドリアのフィロン入門』教文館。
12. フィロン『世界の創造』教文館。
13. 土岐健治『初期ユダヤ教研究』新教出版社。
14. 大林浩『死と永遠の生命――そのキリスト教的理解の歴史的背景』ヨルダン社。